

長い読経が終わって、束の間の静寂が訪れた。小さな執行室の中央にある電灯の光が、青色に塗られた壁に反射して、眼前の男の横顔を薄青く染めている。男は微笑を湛え、部屋の奥を向いたまま微動だにしない。直立不動のその様は、さながら世の中の時間から切り離されているようだ。いや、実際、男の時間はとっくに止まっているのだらう。対象には表情を選択した後に硬直処理する権利が与えられていて、この場に来る人間は皆それを選ぶ。結局、対象を落ち着かせる効果があるという壁の青色は、塗られてからずっと、部屋をひどく不気味にしているだけだ。

私は考える。もし硬直処理していなければ、例えばこの男は一体、どんな表情になるのだろうか。

「読経が終わりました！ 間もなく、執行です！」

部屋の奥、男の視線の先には窓があり、硝子の向こう側に対象の親族、僧侶、実況者、大きなカメラが鎮座している。そして、カメラの向こう側には数百万の人間がいて、この男の結末を今か今かと待っているのだ。皆が当事者として参加することが許されているオンライン実

況は、今日も大盛況だらう。

なぜなら、この男は部外者で、対する私は国選執行官であるから。

国選執行官は国民の模範であり代表である。人々の願いと怒りを背負い、職務を粛々と遂行することが求められる。故に、私の右手には銃が預けられていた。不義を断罪し

正義を知らしめる銀色のボディは、高潔な国民の象徴だ。

『執行官、準備』

部屋に無機質なアナウンスが響く。私は躊躇うことなく、左手で銃のセーフティーを外すと、

『構え』

男の首筋に銃口を向けて、

『撃て』

いつものように、引き金を引いた。

(本編より)

「今日からこちらでお世話になります、奉仕員のヒナと申します。誠心誠意お伝えさせていただきますので、ど

うぞよろしくお願ひします」

私の部屋の玄関前で、少女がぺこりと頭を下げる。無味乾燥な固い表情、平坦な声、グレーのＴシャツにベージュのズボンの服装、無駄なく切り揃えられたショートヘアの髪型、160センチほどの平均的な身長。人間としてニュートラルに調整されたであろう少女からは、特徴というものが全く感じられない。強いて言えば、特徴がないことが特徴なのだろう。

ちらと横に立つ部長を見る。よれたスーツを着て、あくびをしながらハネ気味の頭を掻いていた。自分が連れてきておきながら、少女に対する関心は薄そうだ。

「そういうわけで、奉仕部から送られてきた奉仕員だ。今日から住み込みで雑務をしてくれるらしいから、ありがたく受け入れるように」

部長は気だるげにそう告げる。あたかも普段の指示と同様だと言わんばかりであったが、今回については明らかに説明不足だ。

「どういうことでしょうか。家政婦を雇いたいと申し上げたことではないはずですが」

「知らんよ。昨日の夜、奉仕部から急に連絡が来てな。俺も立ち会いで朝が早くなつてたまらん」

＊

「そうか……まあいい、こいつは頼んだぞ。デメリットはないはずだ」

「厳密には、追加の食費や光熱費等が——」

「いいえ、各種費用については奉仕部が精算するそうです。会計報告も私が担当いたします。一切ご負担にはなりません」

私が口にしたようなとした正当な懸念は、あつけなく、少女によつて払拭されてしまった。

「……そうですか。それでも納得はできませんが、話かして既に決まっていることのようにですし、抵抗は無駄でしょう。お受けします」

「話が早くて助かる。後はよろしくな。もちろん、午前中は半休でいい」

「それは不要です」

「すぐに済むとは思えん。無理するな」

そう言い残すと、部長はヒラヒラと手を振りながら去っていった。小さくなっていく背広を眺めながら、私は考える。部長は半休でいいと言ったが、その必要性が全く感じられない。次回執行に関する書類のチェックが残っている上、午後からはブリーフィングもある。受け入れる以上は少女の対応をせざるを得ないが、早急に終えて職場へ向かわねば——

「ふーっ、ようやく行った。こういう場合はやっぱり緊張するなあ」

抑揚を含んだ声の後に、はあ、というため息が聞こえた。少女の方を見る。ニュートラルだと思っていた少女の顔に、先ほどまでは微塵も感じられなかった、やれやれといった人間的な表情が浮かんでいる。直感的に私は悟った。

「あはは、緊張して朝から疲れちゃいましたよ。で、とりあえず上がっていいですか？ せっかくですし、いろいろお話ししましょう！」

——どうやら、半休は必要になりそうだと。(本編より)

「えー？ うーん、例えば、私とサクラさんが愛を囁きあったり、都市や山、海を巡ったり、ディナーを食べながら綺麗な夕焼けを見つめたり……」

小さく甘い声でヒナが語り始める。現実には起こりえないであろう可愛らしい妄想を話す度に、ヒナの瞳はきらきらと輝いた。

「ね、素敵じゃないですか？ 空想の世界でなら、私は自由に生きていきますよね。好きなように生きて、好きな人たちと未来や世界について語り合って、助け合って」

「……………」

「空想の世界なら私は捕まったりしないし、奉仕部に入られることもないんですね。誰かを見捨てたりしなくてもいいんですね。誰かのことを思ってもいいんですね」

確かに彼女の瞳は輝いていた。それは少女が妄想に思いを馳せているせいもあるし、話を聞く限りきつと、彼女の過去に何かがあったのだろうとも思った。

「私の中でなら、私は、当事者……」

(本編に続く)

広告欄

この作品の完全版は、第三十一回文学フリマ東京で頒布予定の「next kawaii inversion」に収録されています。

